

最近、テレビのニュースで、安倍晋三首相が昭恵夫人と手をつなぎながら、政府専用機のタラップを降りてくる光景をよく目にする。外遊の場面で手を握るのは、安倍首相が第一次内閣のころからのおなじみのスタイルなのだが、ちよつと見る回数が多すぎる気がする。

調べてみると、安倍首相が就任一年七カ月で訪問した国は四十七。九月にはバンダラデシユとスリランカを訪問する予定だから、歴代一位の小泉純一郎首相の四十八カ国を抜くのは確実だ。小泉氏は在任五年五カ月での記録ということを考え合わせると、安倍氏の異様な外遊ぶりがよく分かる。

ここで思い出すのが、民主党の野田佳彦氏が首相就任前、自民党長期政権の中核にいた人物に「政権運営の心得」を聞いた時のエピソードだ。この人物はいろいろなアドバイスする中で、野田氏にこんな話もしたそうだ。「外遊の回数はなるべく多くした方がいい。総理が外遊した場合、同行記者は悪く書かないから。それが政権浮揚になる」。そういえば、元日本経済新聞記者の田勢康弘さんも「政治ジャーナリズムの罪と罰」（一九九四年、新潮社）という本でこんなことを書いていた。いわく「サミットでは日ごろ、極めてドメスティック（国内的）な取材報道に明け暮れている首相官邸や外務省担当の同行記者が『自らの晴れ舞台』とばかりに大量の記事を書く。しかし、ほ

見せ方のうまい人、下手な人

とんどの記者は国際政治の取材経験がなく、外務省が会議後に日本語で行うブリーフィングを基に原稿を書く。いつの間にか政府が書いてほしい材料を優先的に記事にすることに「なる」と。

もちろん、政治はそんなに思い通りに進まない。民主党政権最後の首相となった野田氏は、いくら外遊しても政権浮揚にはつながらなかった。記者も政権の意図が分かっている。鵜呑みにするようなことはないだろう。

だが、最近「ちよつと、大丈夫かな」と思ったりもする。首相が海外へ行くたびに、訪問した開発途上国と日本の関係の重要性が過剰に報道されたり、首相が外国首脳と握手をしてフラッシュを浴びるニュースをあまりにも繰り返して見せられたりするからだ。

外交が重要で、首相自らのトップセールスに意味があることに異論はないが、支持率に陰りが見え始めている時期だけに、政権のマスコミ対策の意図の方が気になる。

訪問先がどちらかというところではなく、外交上の懸案を抱える肝心の中国、韓国はいまだ訪問できていないのだから、なおさらだ。

安倍政権のメディア対策の巧みさは、定評がある。自らがどう見えるかを意識し、フェイスブックやテレビ出演などを通じた独自の発信も欠かさない。政権に批判的な

朝日新聞などとは明確に対峙し、産経、読売、NHKなど保守的なメディアとの関係をうまく使って世論醸成を図るのも特徴だ。こうした「見せ方のうまい政治」と対局にあるのが、ここ最近、地方議会でも相次いだ不祥事だろう。評価のしようがない兵庫県の「号泣議員」は別として、都議会のセクハラやじや、道議の航空機内での暴言騒動を見ると、「あれが本音だったんだろうな」とストリートに思ってしまう。

政治家はある意味で社会を映す鏡だ。実際、女性に対して「早く結婚しろ」とか「子どもは産んだ方がいい」と露骨に言う男性は、政治家に限らず決して少なくない。レストランやタクシーなどで「客」という立場を得ると、急に居丈高になって、思いやりのない暴言を吐くような人もよく見る。

草食化する社会の空気を反映してか、政治家もスマートになり、最近の永田町では剛腕とか、強面と言われるような人はほとんど見なくなった。しかし、物静かに見えても自己顕示欲が強く、个性的でしっかりと深い人が多いのが政治家だ。だから人間くさく、魅力的であるとも言える。

政策重視のかけ声の下、最近「コディネット」が巧みすぎて（あるいは逆に下手な人が目立ちすぎて）、政治家の本当の姿が見えにくくなったような気がする。わかりやすすくない時代だからこそ、自分なりの見極めが大切だとあらためて思う。△由▽